

一 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 危険なゲキヤク (2) 技術カクシン (3) 鼻がキク (4) キカク外の大きさ (5) コシヨウした機械

二 次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

木琴 もつきん 金井 直

④ 妹よ

今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない

お前はいつも大事に木琴をかかえて
学校へ通っていたね

暗い家の中もお前は
木琴といっしょにうたっていたね
そしてよくこう言ったね

「早く街に⑤赤や青や黄色の電燈がつくといいな」

あんなにいやがっていた戦争が
お前と木琴を焼いてしまった

妹よ

お前が地上で木琴を鳴らさなくなり
星の中で鳴らし始めてからまもなく
街は明るくなったのだよ

私のほかに誰も知らないけれど

妹よ

今夜は雨が降っていて
お前の木琴がきけない

(飛高隆夫・野山嘉正編『展望現代の詩歌第3巻 詩Ⅲ』明治書院)

(1) ——— ④ 「妹」とありますが、実際にはこの作者に「妹」は存在しません。では、この「妹」とはどのような人を指しますか。詩全体を読み、詩中の言葉を用いて五字以上十字以内で答えなさい。

(2) ——— ⑤ 「赤や青や黄色の電燈」はここでは何を象徴していますか。
ア 混乱 イ 平和 ウ 開花 エ 家族

(3) この詩を説明した次の文章について、以下の問いに答えなさい。

この詩は、⑥過去の「妹」の生活を語る部分と、「妹」へ語りかける部分と大きく二分される。
「妹」は「木琴」が大好きで、昼も夜もいつも「木琴」とともにいた。当時、「木琴」を好む女の子はどこにでもいるごく普通の子で、そのやわらかな音色は、⑦による不安定な日常や、不安定な人々の心をまるで大きく包み込むような穏やかさをもっていた。
⑧による理不尽で不自由に満ちた生活に耐え、やっと⑨長かったそのときは終わった。だが、「妹」の姿はもうここにはない。そこで、作者は⑩の輝きに生前の「妹」と「木琴」の姿を重ね合わせているのである。

① ——— ⑥ 「過去の「妹」の生活を語る部分」は第何連ですか。あてはまる連数を算用数字ですべて挙げなさい。

② ⑦ に入る語を詩中から一語で書きぬきなさい。

③ ——— ⑧ 「長かったそのときは終わった」ことが分かる部分を詩中から十字以内で書きぬきなさい。

④ ⑩ に入る語を詩中から一語で書きぬきなさい。

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

昔は、ニワトリたちもまだ、自由だった。自由ではあったが、しかし原始的でもあった。たえずネコやイタチの危険におびえ、しばしばエサをさがしに遠くまで遠征したりしなければならなかった。ある日そこに人間がやってきて、しっかりと金網つきの家をたててやろうと申し出た。むろんニワトリたちは警戒した。すると人間は笑って言った。見なさい、私にはネコのようなツメもなければ、イタチのようなキバもない。こんなに◎な私を恐れるなど、まったく理屈にあわないことだ。そう言われてみると、たしかにそのとおりである。決心しかねて、迷っているあいだに、⑩人間はどんなニワトリ小屋をたててしまった。

ドアにはカギがかかっていた。いちいち人間の手をかりなくては、出入りも自由にはできないのだ。こんなところにはとても住めないとニワトリたちがいうのを聞いて、人間は笑って答えた。諸君が自由にあげられるようなドアなら、ネコにだって自由にあげられることだろう。なにも危険な外に、わざわざ出ていく必要もあるまい。エサのことなら私が毎日はこちらできて、エサ箱をいつもいっば

いにしておいてあげることにしよう。

一羽のニワトリが首をかしげ、どうも話がうますぎる、人間はわれわれの卵を盗み、殺して肉屋に売るつもりではないのだろうか？ とんでもない、と人間は強い調子で答えた。私の誠意を信じてほしい。それよりも、そういう君こそ、ネコから金をもらったスパイではないのかね。

これはニワトリたちの頭には少々むずかしすぎる問題だった。スパイの疑いをうけたニワトリは、⑪そうであることが立証できないように、そうでないこともまた立証出来なかったのだ。とうとう仲間はすれにされてしまった。けっきょく、人間があればいいのだから、一応は受入れてみよう、もし工合がわるければ話し合いで改めていけばよいという、◎「良識派」が勝をしめ、ニワトリたちは自らオリの中にはいつていったのである。

⑫その後のことは、もうだれもが知っているとおりのことだ。

(安部公房『安部公房全集9』新潮社)

(1) ①に入る語を答えなさい。

ア 感情的 イ 本能的 ウ 打算的 エ 直接的

(2) ②③それぞれの「笑って」には、「人間」のどのような気持ちがこめられていますか。

ア ②は思いがけず警戒されとまどう気持ち、③はなんとかニワトリの危険を取り除こうという気持ち。

イ ②は自分たちの考えを見すかされて逆上する気持ち、③はどうにかだまして小屋に入れようという気持ち。

ウ ②はせつかくの提案を疑われあざ笑う気持ち、③は自由をほしがるニワトリを心配する気持ち。

エ ②③両方とも自分たちの真意をかくして、表面を取りつくるおうとする気持ち。

(3) ④に入る語を答えなさい。

ア 平和的 イ 協力的 ウ 科学的 エ 積極的

(4) ⑤の「人間はどんなニワトリ小屋をたててしまった」とありますが、それはなぜですか。

ア この際ニワトリとの話し合いはむだなので、どんなおしこめてしまおうと考えたから。

イ 小屋が完成して初めて、ニワトリたちを自由にしておけることができると判断したから。

ウ 実際に小屋を建ててみると、人間にとってもこの話がいい話かどうか分からないから。

エ 小屋さえできていれば、ニワトリの心が少しでもかたむいた時にすぐに入れられるから。

(5) ⑥の中の「そう」(二カ所)が指す内容は何か。二つ答えなさい。

ア 人間がニワトリに提案していることは信用できるということ。

イ 人間は気づかぬながらもニワトリをだまそうとしていること。

ウ 人間が言う通りニワトリの中にネコのスパイがいるということ。

エ 人間の提案は何回も話し合いによって改められるということ。

オ 人間に危険を取り除いてもらえば自由が手に入るということ。

(6) ⑦「良識派」では、あえて「」が付けられています。それはなぜですか。

ア 良識派が仲間に対して強引に主張を押し通したことを読者に強調するため。

イ 良識派が出したこの考え方が最も優れていることを読者に強調するため。

ウ 彼らの決定が節度をわきまえた健全な判断であることを読者に訴えるため。

エ 本心に良識であるのかどうか、読者に考える余地を与えるため。

(7) ⑧「その後のことは、もうだれもが知っているとおりのことだ」とありますが、このようになってしまふことが暗示されている部分は本文中に何度か出てきます。その中で一番はじめに書かれている一文を探し、はじめの五字を答えなさい。

(8) この文章の筆者は、直接的な表現を避け、人間とニワトリのたとえ話に託すことによって自身の主張を伝えています。これを寓話といいますが、筆者はこのたとえ話を通して我々に何を伝えようとしていますか。次のア～オの文章を読み、間違っているものをすべて選びなさい。

ア 良識派の意見は、社会に受け入れられやすい考え方のことであり、特に意見のない者はその言動・主張に従うのがよい。

イ 一見あるいは一聞するともっともらしい言葉でも、しっかりと分析し裏付けられたものであるか、厳しくその内容を検証する必要がある。

ウ 誰もが当然のこととして疑いなく受け入れる言葉でも、あやまった結果を招く場合がある。

エ 政治家や権力者といった社会的地位などが高い人間の言葉をすぐに受け入れてしまふ人間の愚かさを暗に示している。

オ 一概に良識派が発信する情報というものは有害なものであり、安易に耳を傾けてはならないという警鐘を鳴らしている。

四

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

箸は日本人の食生活と密接に関係し、一五〇〇年の歴史をもつ食事用具である。箸はただ二本の棒にすぎないが、食事が始まり、箸として手に持つと、さまざまな働きをすることができ、食べ物をきりわけ、つまむ、はさむ、すくいあげる、(海苔などを) まきつける、ほぐすなどの食事中に必要な機能を、単なる二本の棒であるのに、あたかも手の指の延長のように自由に操ることができ、これに対して、ナイフやフォークやスプーンなどはその形状から予想できるように、アである。

ナイフやフォークは平らな皿(プレート)に盛られた料理を食べるのに適している。箸は平らな皿からでも深い碗(わん)からでも、食べ物を自由にはさんだりつまみ上げたりすることができる。魚の骨から容易に身を取り外したり、見た目にも美しく食品を一つの皿に盛り合わせるのも箸ならではの機能である。箸という食事用具を用いるようになったのは二〇〇〇年以上も前の中国においてであるが、ヨーロッパでは手以外の食事用具を用いる試みはこれより少なくとも約一〇〇〇年遅れて始まっている。

中国では齊家文化時代(紀元前二〇〇〇年頃) 餐叉(フォーク状の食事用具)が用いられたことがある。イ、あまり使われないまま姿を消し、箸が食事用具として早くから定着したのであった。中国は箸と匙を用いるが、日本は箸が食事用具の中心となった。日本で箸だけで食事をするのは調理形式や食事様式によるということが大きな理由であるが、それは日本の文化と深いつながりがある。

日本で箸だけで食事をするようになった大きな理由は、膳の上の食器を持ち上げて食べることで、そして木の碗を用いることである。箸を右手に持ち、左手に碗を持つことによって食事は円滑にできるわけである。日常、ナイフやフォークを使っている人にとっても、箸は少し馴れれば充分使うことができるので、ロ食事用具としての合理性を一面から肯定するものであると考えられる。それは先にも述べたように、人間の手指はこのような食事用具を操ることができるようになっていくからである。

食習慣、食様式の違いから、フォークを持つか箸を持つかという二つの食事様式に分かれたのである。ヨーロッパでは獣鳥肉の焼き物が主であり、日本では

肉質のやわらかい魚介類や野菜などの煮物が主であったという違いはあるが、なんらかの食事用具を用いるという点は共通している。現在の日本は和、洋、中華と、ほとんど世界のあらゆる料理を取り入れた食事様式になっており、将来ますますその傾向は進むと考えられる。しかし、食べ物を口に運ぶ用具はどのようなべきかを考えるとき、食様式によってスプーンまたはフォークがふさわしい用具であっても、ハやはり箸が中心の食様式になっていくと思われる。箸は長く細身になる傾向があるが、テーブルの雰囲気に合わせていたものであろう。このように、箸の形がどのようなになれば使いやすいか、また、食事様式にマッチするか、日本人は箸の形にいつも繊細な心配りをしているのである。食事様式が複雑になればなるほど、数多くの食品の中から必要なものを取り出す機能においては箸が最もふさわしい食事用具であることを日本人は自覚しているといえる。

わが国は地理的な位置関係から、古代より中国大陸から先進文化を学んできた。十六、七世紀にはポルトガルやオランダを通して初めて直接ヨーロッパ文化に出会った。この後、徳川幕府は鎖国政策を採るのであるが、その二五〇年余の年月の間に、それまでに影響を受けた国々の文化および唯一開かれた長崎から入る諸外国の文化を自国流に消化し、純粋に日本の風土に育まれる文化と同化させ、いわゆる日本文化を醸成させたといえる。

日本を紹介するのに挙げられる能や歌舞伎、茶道、華道、伝統的な日本料理などはこの時代に洗練されたのである。料理の面からいえば、北半球のほぼ温帯に位置し、四季の変化がはっきりしているわが国では、折々の滋味豊かな海の幸、山の幸の食品材料を使って、食品本来の持ち味を活かすように調理することが重視された。幸いに現代と違って山紫水明の時代であったので、調理に使う水のニの良いことは食品の持ち味を引き出すのに適していた。諸外国の料理にあるような何種類かの食品を共に煮るとか炒めるのではなく、箸でつまめる大きさで、その食品の形に合った切り方をし、それぞれの食品の色を生かし、素材の固さに合わせた煮方をした。そうした各々の煮物を、色、形、味の調和よく一つの器に盛る「炊き合わせ」のような料理が生まれた。仏教の影響で獣肉食は避けられ、魚介類の料理が発達した。鳥類や魚介類を切り捌くのを「割」といい、煮ることを「烹」というので、日本料理の多くが「割烹」と称し、特に魚

介類の料理が専門であることを示した。ホ、「さしみ」に見られるように「包丁の刃」が望まれた。また、日本料理の調理には終始「菜箸」が使われ、天ぷらには太い菜箸を使い、盛り付けには細身の菜箸あるいは真魚箸が使われる。盛り付け用の菜箸は、料理された品を組み合わせて器に姿よく盛り付けるのに適している。そして食事には、二本の細い棒の箸が用いられた。それは、食品の個性を生かして料理された繊細な味を他の味と混じることなく味わえるという特長をもつ。

一八世紀に入り、イギリス、アメリカ、フランスなどの諸国との積極的な接

触があり、一七世紀以来の鎖国政策が解けて一九世紀(一八六八年)の明治維新となり、中国の濾過器なしに欧米文化に全面的に浴することになった。二〇世紀半ばの第二次世界大戦敗戦後は交通通信機関や物流部門のめざましい発達により、世界各国の文化に個人レベルで接することができるようになった。最近では外国の品々が日本にいながら簡単に手に入れることができ、生活様式も伝統的といわれる様式から欧風を取り入れた折衷式に変化した。

(向井由紀子、橋本慶子『ものと人間の文化史二〇二 箸』法政大学出版局)

一

アにはどれが入りますか。

- ア 食事用具として使いづらさばかりが目立つ道具
- イ 本来の用途以外の補助的な役割に意味がある道具
- ウ 料理の味を引き立てるさまざまな働きをする道具
- エ 器具そのものも具体的な機能のための道具

二

イ「食事用具としての合理性」とありますが、箸の持つどのような特徴が食事用具として合理的なのですか。「一丁点」に続くように本文中から二十五字で探し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

三

ロ「やはり箸が中心の食様式になっていくと思われる」と筆者が考えるのはなぜですか。

- ア 箸は、日本の伝統文化に根づいた道具であるがゆえに、世界のあらゆる料理を取り入れた食事様式についていけないから。
- イ 箸は、場面や素材に応じて多様な形態をとることができるため、美しい見た目にこだわる日本食には必要不可欠だから。
- ウ 箸は、自分が思う通りに食べ物を扱うことができるので、どのような場であっても臨機応変に対応することができるから。
- エ 箸は、食事様式が複雑化するほど使いづらい道具だが、ナイフやフォークよりも優れていると認めざるをえないから。

四

ハには「量」と反対の意味の言葉が入ります。漢字一字で答えなさい。

五

ニに入る接続詞を答えなさい。

- ア または
- イ すなわち
- ウ しかし
- エ なぜなら
- オ さて

(6)

「伝統的な日本料理」について以下の問いに答えなさい。

- ① 「伝統的な日本料理」にとって、調理する際に大切にされてきたことは何ですか。本文中から十二字で探し、はじめの四字を書きぬきなさい。
- ② 「伝統的な日本料理」における箸の役割について説明している文として正しいものはどれですか。
- ア さまざまな食材の個性を融合させ調和させることで新たな味を生み出すもの。
- イ 料理を味わうためだけでなく、見た目の美しさを生み出す際にも役立つもの。
- ウ 無駄をそぎおとした機能的な形が、盛り付けられた料理の美をひきたてるもの。
- エ 日本独自の用具であり、調理と食事の両方にとって欠かすことのできないもの。

五

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

風早の街の駅前商店街のはずれに、夕暮れどきに行くと、古い路地の赤い鳥居が並んでいるあたりで、不思議なコンビニを見つけるところがあるといいます。そのコンビニには、この世で売っているすべてのものが並んでいて、そうして、この世には売っていないはずのものがなんでもそろっているというのです。店の名前は、たそがれ堂。不思議な魔法のコンビニです。

雄太は、秋のその夕方、アスファルトの道をけとばすようにしながら、歩いていました。胸の奥が苦しくて重たくて、なにかを壊してしまいたいような、自分を殴りつけてやりたいような、④そんな気分で歩いていました。

と、そのコンビニエンス・ストアにでくわしたのです。

そのコンビニは、夕暮れの赤い空の下、ぼつんとそこにありました。

学校のそばの大通りをはずれた、裏通りのビルのすき間の向こう。古い赤い鳥居が、いくつも並んでいるあたりです。鳥居のそばに、ひょっこりと建っていたのです。

こんなコンビニ知らないなど、雄太は思いました。稲穂のマークの看板です。

「最近できたのかな？……いや、それにしても、なんか古くねえか？」

雄太は、ポケットに手をつつこんで、ドアをくぐりました。

おでんの匂いがします。レジのそばに立てかけられた手書きのメニューに「おいしいお稲荷さんあります」と朱色の字で書いてあるのが目立ちました。

お客さんが、何人かいます。きれいなお姉さんとすれ違ったとき、その人に足がないように見えて、雄太は、ぎょっとしました。足もどが、すうっとかすんでいるのです。床が、透けて見えます。体が、浮いています。

まさかと思って目をこすったら、細い白い足が、ちゃんとありました。

お姉さんは雄太を笑顔でちらつと振り返ると、レジでお金を払って、ハイヒールをならして、お店を出て行きました。

首をかしげながら、雑誌でも立ち読みしようと、棚に近づいたら、

「いらっしやい。どうした少年、元気がないな」

レジのお兄さんに声をかけられました。

長い髪は銀色で、目は光る金色です。なんだかきらきらした感じのお兄さんが、白地に赤のしましまの制服に、小さな赤い蝶ネクタイをして、帽子なんてかぶって、レジの向こうで、にっこり笑っています。

（なんだ、こいつは……？ コンビニの兄ちゃんが、あの髪に目ってありか？）
妙だし、なぜだか怖いのです。細くてとがった感じの顔がなかに似ているからだ、と思ったら、いつかお祭りの屋台で見た、白い狐のお面に似ているようなのでした。

「おいおい。そんなにひくなよ。雄太くん。取って食いやしないからさ」

お兄さんは笑いました。コンビニの店員さんにしては少しばかり丁寧じゃない話し方だと思いましたが、やわらかくて、明るい笑顔と、声でした。

（目と髪はたしかにあれだけど、やさしそうな、イケメンの兄ちゃんだよなあ……）

なんでこの顔が、狐のお面に見えたんだろう、と。雄太は首をかしげました。よくよく見れば、見なくても、ふつうの、ハンサムなお兄さんの顔です。

それにしても、不思議なのは……。

「……おい、兄ちゃん。おれの名前、なんで知ってるんだよ？」

お兄さんはレジのそばにあるおでんの鍋を、おたまで楽しそうに混ぜながら、「そりゃ知ってるさ。だってきみは、この界隈の有名なだからね。街でうわさの、正義のヒーローじゃないか。風早中央小学校五年三組の江藤雄太くん」

雄太は自分の耳を疑いました。

「おれはただの小学生だぞ？」

有名な人なかであるはずがありません。ましてや正義のヒーローだなんて。

でも気がつくのと、店にいるほかのお客さんたちがみんな、雄太のほうを見たり、振り返ったりしているのです。そっと指をさしたり、物陰から見つめていたり。にこにこ笑いながらささやき交わしているおばさんたちまでいます。

「……ほら、あれが」

「ああ、あの子か」

そんな感じで。

（なんか、気持ち悪いなあ……）

【中略】

「おでこにけんかの傷あとが光る、無口だけどかわいい男」

それが、学校での雄太でした。

実際雄太は、言葉少なく、正義漢、「男らしいね」と言われる子なのですが、内面は「猫好きで、かわいいものが大好きで、涙もろい心やさしい少年」だったりして、でも、それを、自分以外の誰にも気づかれないのでした。

（だって恥ずかしいじゃんか……）

男は硬派に生きるべきだ。と、つねづね雄太は思っていました。

雄太は、シリアスな顔を作ると、雑誌を手にはレジに向かいました。

ガラス窓に、額の傷が、長く光って映ります。それほどに目立つ、大きな傷あとなのですが、雄太はかっこいいと思って、⑤気に入っていました。

怪我をしたのは、去年の冬のことでした。河原で年老いた猫をいじめていた中学生に、それをやめさせようと飛びかかっていった、そうしてできた傷だったのです。

雄太は投げられてもけられても、中学生に飛びついてゆき、最後は額がぱっくりさけて血が流れても、まだ向かっていったので、中学生は怖くなったのか、捨てゼリフを残して、逃げ出してくれたのでした。

（あのときの猫、元気かなあ……）

このときの猫は、その後十日間雄太が看病し、家に置いか河原にもどすか迷った結果、河原にもどしました。それきり、見かけることはありませんでした。

（じいさん猫……元気ならいいんだけど。美音なら、あんなとき、どうしたかな……）

その子のことを思い出すと、ため息が出ました。

くるくるした瞳と、やさしい声と、やわらかそうな髪。

（おれ、あんないい子を傷つけて、泣かしちゃったんだよ……）

ため息は、何度も出ます。止める気力もありません。

「なあ少年」と、レジの向こうのきらきらのお兄さんが、おつりを渡してくれながら、雄太に話しかけてきました。

「いったいぜんたい、なにを落ちこんでるんだ？ よかったら、どうだ、話さないか？ 悩みごとっていうのは、人に話すことで、楽になるっていうぞ」

【中略】

雄太が美音と初めて話したのは、今年の、梅雨の頃のことでした。

通学路にある住宅地のごみ捨て場のそばで、雨が降る中、捨てられていた小さな子猫。その子猫を抱いて、かわいそうかわいそうと泣いていたのが、美音でした。

「ごめんね」と、美音はぬれた子猫に謝っていました。抱きしめて、泣いていました。

「……うちはママが、とつてもとつてもひどい猫アレルギーなの。猫の毛があると息が苦しくなるの。おうちには連れて帰れない。せめて雨がやむまで、抱いてあげるから。そうしたら、少しはあったかいよね。……ごめんね。ごめんなさい。」

「……おい。ちょっと待て」

雄太が声をかけたのは、子猫が気になったというのもあるのですが、美音がせきとくしゃみを交互にしている、呼吸が苦しそうだっただけからでした。

びっくりしたような顔をしている美音の手から、白い子猫を抱き取って。

「ひょっとして、ママだけじゃなく、おまえも、猫アレルギーなんじゃないのか？」

「……」

「しょうがねえなあ、もう。おれにまかせろ」

そうして、その子猫は、雄太の家の十四匹目の猫になったのです。

雄太と美音は、その日まで、口をきいたことがありませんでした。

ふたりとも無口なほうだったし、教室で、席が離れていたからです。

本当のことを言うと、雄太は、美音のことを、ひそかに、かわいいな、と思っていた。だけど、女の子に対して、そんなことを思う自分が、軟派な感じがして許せなくて、見えないふり、なんとも思っていないふりをしていました。でもその日から、ふたりは少しずつ、話すようになりました。なによりも美音

が、子猫の話を聞きたくて、雄太に話しかけてくれるようになったからでした。そんなとき、雄太は人がいない場所に美音を呼んで、続きをこっそり話したりしたので、そんなふうには、学校で、ふたりだけの秘密にしたいにして、子猫の話をするのは、いつかとおきのおきの大事な時間になってゆきました。美音も楽しそうだったし、雄太も、猫好きがばれてしまっている美音の前だったら、いくらでも顔をとりかえさせて、子猫のかわいいしぐさの話ができたのです。

でも、ふたりの仲が良くなるにつれて、雄太の友人たちが、面白半分になんかすようになつてきました。そんなある日のことでした。放課後に、友だちと教室で話していた雄太のところに、急に美音が走ってきました。

⑤きゅつと口をむすんで、きれいなメモ帳を、雄太に差し出しました。

みんなの目の前で。雄太を、雄太だけを、まっすぐに見上げて。

それは、とびきりかわいい子猫の写真がついた、赤いメモ帳でした。

そのメモ帳は、美音の大切な宝物だと、雄太は知っていました。買ったままもったいなくて使えないでいたくらい、美音のお気に入りだったのです。

(どうして、おれに、こんな大切なものを?)

顔を真っ赤にして立ちつくす美音を見つめて、雄太はなにとも言えませんでした。

友だちみんなが、ふたりを冷やかして、わいわいはしゃぎ始めました。雄太が怒ってもやめようとしません。美音はただ雄太を見つめて、メモ帳を差し出しています。

席をけるように立ち上がった雄太は、とつさに、

「いらねえよ」

と、⑥そのメモ帳を手で払いのけてしまいました。

美音の目に、涙が浮かびました。あの雨の日に見た涙のような、悲しい涙でした。

美音は床にしゃがみこみ、赤いメモ帳をそっと拾い上げると、教室から出て行きました。静かに、何も言わないで、うつむいて出て行きました。

雄太は、体が凍りついたように、それを見ていることしかできませんでした。

雄太はそのメモ帳に駆けより、拾い上げました。子猫の写真がついたメモ帳で、とびきりかわいい子猫の写真も、赤く素敵なデザインも、間違いなく美音のメモ帳と同じでした。

まさかと思いが、ふるえる手で、中を開くと、最初のページに、かわいい字で、雄太へのメッセージが書いてありました。

『雄太くん。あのとき、子猫とわたしを助けてくれて、ありがとう。クリスマス頃には、一度日本に帰るから、そしたら遊びうね。約束ね。美音』

そんなことがあるはずがない、と、雄太は思いました。

でも、そのメモ帳は、たしかに、そこにあったのです。

雄太は、レジのお兄さんのほうに、⑦ぎくしゃくした足どりで近づきました。黙って差し出すと、

「お代はいいよ。そのメモ帳は進呈しよう」と、お兄さんは微笑みました。

「コンビニたそがれ堂から、この街のヒーローへのプレゼントさ。ほくから、いや、このお店の常連さんからのプレゼントっていうことにしようかね」

街話のコーナーのあたりに、⑧ひとりのおじいさんが立っていました。

しましまのあたたかそうなセーターを着たその人は、懐かしそうな笑顔で雄太のほうを見ると、深く頭を下げて、店を出て行きました。

(あのセーターの、しましまの色……)

なんだか見覚えがある色だと思ったら、去年助けた、あのおじいさん猫の、そのしま模様似ていたのです。

(1) ———— ④「そんな気分」とありますが、このときの〈雄太〉の「気分」を説明するものを答えなさい。

- ア 先を悲観している
イ 人に腹立てている
ウ 何かを恐れている
エ 自分を責めている

(2) ———— ⑤「漢」の意味を答えなさい。

- ア 主役 イ 名人 ウ 勇者 エ 男性

それきり、雄太は美音と話しづらくなりました。美音も教室で雄太と目が合うたびに、なにか言いたそうにしては、⑨になつてうつむくばかりで。

雄太は、美音に謝らなければ、と思っていたのですが……。やがて一学期が終わり、夏休みになりました。長い夏休みが終わって二学期が始まると、美音の席は、がらんと空いていました。

先生が、美音は家の都合で、アメリカに行ったのだ、と、クラスのみんなに言いました。夏休みのあいだに引越したのだと。

そうして初めて、雄太は気づいたのでした。

お別れに、記念のために、美音はあのメモ帳を、雄太にプレゼントしたかったのだと。内気だったから、そしてたぶん、お別れがとても悲しかったから、そのことを、美音はあのとき、雄太にとつさに話せなかったのだと。だから、ただ一生懸命に、メモ帳を差し出していたのだと。

【中略】

「あの子はきつと、猫好きのおれが喜ぶと思って、とっておきの大切なものをくれようとしたのに。あのメモ帳は、あの子の宝物だったのに。きつとあの子は、さみしい悲しい気持ちのままで、日本とお別れしたんだ。おれは最低だ。あんなやさしくて、いい子を傷つけちゃったんだ……」

もう一度、あの日やり直せるなら。何度目かで、雄太はそう思いました。

(あのメモ帳が、いま目の前にあれば、いまここにあれば、大事に、受け取るのに)

そのとき、レジのお兄さんが言いました。

「ああ、そのメモ帳だったら、ほら、そのへんの棚にあるよ」

まさか、と、雄太は思いました。あのメモ帳は、美音のメモ帳は、世界にたった一つ。コンビニなんかにあるわけがありません。

けれどお兄さんは笑って言いました。

「このコンビニは、大事な探しものがある人がくる店だ。それがどんなものだった、お客さんに必要なものは必ず売っている、不思議なコンビニなのさ。まあだまたされたと思って、その棚を見てごらんよ」

お兄さんの指がさすほうを、雄太は、ふらりと振り返りました。

文房具の棚があります。ノートがあつて、レポート用紙があつて……。

「あつ」

店を出ると、外はまっ暗でした。いつの間に、夜になったのでしょうか。なにかの魔法がかかったように、一気に時間が流れたようでした。

ネオンサインが輝く中を歩いていると、知っているはずの道なのに、どこか異世界に迷い込んだような気がしました。

まるで「狐に⑩た」みたいだな、と、雄太は思いました。たしかこんなふうな気分を言う言葉だったと思います。

「ああ、早く帰らないと、母ちゃんに怒られちゃう。晩めし、残ってるかな？」

赤いメモ帳をしっかりと握りしめて、雄太は走りました。そうしないと、失くしてしまふような気がしたのです。手の中から、消えてしまふような。

(夢見てるんじゃないかな……おれ)

けれど、家に帰って、お母さんにただいまを言って、部屋に帰っても、まだそのメモ帳は、手の中にあつたのです。

【中略】

それから、一か月が過ぎました。

少しずつ十二月が近づいてくるのが、いまの雄太の一番の楽しみです。

クリスマスには、美音が帰ってくるのです。アメリカから、飛行機に乗って。

あのコンビニには、あれきり行っていないです。

⑪行つてみたなくても、行けなかったのです。

(村山早紀『コンビニたそがれ堂』ピュアフル文庫)

(3)

③「気に入っていました」とありますが、それはなぜですか。

ア 傷ができた理由を話題にして正義の味方という自分を周囲にアピールできるから。
 イ 子猫を助けて恥ずかしく思いつつも〈美音〉から勲章をもらった気がしたから。
 ウ 自分が傷ついても中学生に立ち向かっていった名譽のあかしだと思っていたから。
 エ 硬派で猫好きという世間のイメージが自分にとっての自負につながっていたから。

(4)

④「顔をとりけさせて」と対照的な〈雄太〉の表情を本文中から六字で書きぬきなさい。

(5)

⑤「きゅっと口をむすんで」に込められている〈美音〉の心情を答えなさい。

ア 友人たちのいる場でも、きちんと自分の淡い恋心を打ち明けようという思い
 イ 周囲の友だちから冷やかされても、自分で別れと感謝を伝えようという思い
 ウ 雄太の硬派なイメージがくずれても、大切な宝物を雄太に渡そうという思い
 エ 今後たとえ二人が気まづくなっても、雄太の優しさから卒業するという思い

(6)

⑥「そのメモ帳を手で払いのけてしまいました」とありますが、左の文章はその理由を説明したものです。()に入る表現を、⑥より前の本文中から十二字で見つけ、はじめと終わりの四字を答えなさい。

そのメモ帳を受けとると、() 思えて受けとれなかった

(7)

⑦に入る〈美音〉の表情を答えなさい。

ア 泣きそうな顔 イ いきり立った顔 ウ 驚いた顔 エ 不愉快な顔

(8)

⑧「ぎくしゃくした足どり」について、このときの〈雄太〉の心情を答えなさい。

ア まるで自分が異空間に迷い込み、現実には帰れなくなるのではと不安になった。
 イ 日常の延長線上にありながらも、起こりえない現実には直面し思わず動揺した。
 ウ 次々にふしぎな出来事が起こり、手帳に書かれた美音の言葉に恐怖を感じた。
 エ これでやっと自分が未来へと一歩前進することができると確信して緊張した。

(9)

⑨「ひとりのおじいさん」と〈美音〉だけが知っている、雄太の意外な人物像を、「人物」に続くように本文中から二十六字で探し、はじめと終わりの四字を答えなさい。

(10)

⑩に適切なひらがな四字を入れ、「どうしてそうだったか、わけが分からずぼんやりするようす」を表す慣用表現を完成させなさい。

(11)

⑪「行ってみたくても、行けなかったのです」とありますが、なぜ「行けなかった」のですか。文中の言葉を用いて、その理由を「くから」に続くよう四十字以上五十字以内で説明しなさい。

氏 名	
-----	--

受験番号					
------	--	--	--	--	--

- ・句読点や「 」も一字とします。
- ・記号の付いているものはすべて記号で答えなさい。

一	(1) ゲキヤク	(2) カクシン 技術	(3) キ 鼻が	(4) キカク く	(5) コシヨウ 外
---	-------------	-------------------	----------------	-----------------	------------------

二	(1)					(2)	(3)				
					5					①	②
	(3)										
	③										④

三	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)				(8)

四	(1)	(2)										(3)	(4)	(5)		
							～					点			㊀	㊁
	(6)															
	①				②											

五	(1)	(2)	(3)	(4)					(5)							
	(6)										(7)	(8)				
				～				思えて…								
	(9)										(10)					
				～				人物	狐に					た		
	(11)															
					40											から

合計	
----	--